

シャーナーメの音韻と韻律に関する若干の考察

井 本 英 一

I

フェルドーシーの言語——10世紀のペルシャ語——については、まだその言語の方言的要素及び音韻について若干の疑問な点が残されている。方言学的には、その根幹をなすファールス方言すなわち標準ペルシャ語の上に、10世紀のフェルドーシーの生地ホラーサーンの方言すなわち北部イラン方言ないし東部イラン方言が織り込まれ、西部イラン方言がそれに混合せられているものと考えられる。語彙の上からいえば、シャーナーメのペルシャ語は殆どアラブ語的要素を含んでいない。現代の標準ペルシャ語は、アラブ語の要素を除いてみても、シャーナーメのそれとはかなりの隔りが感ぜられる。シャーナーメの音韻も現代ペルシャ語のそれからのみでは解決できないものがある。以下シャーナーメの音韻ことに子音組織の一端を考察しあわせて韻律の問題にふれてみたいと思う。

シャーナーメの言語の中には、šāh, šahの如く母音の長短二形を具えた同一意味の語が若干存在している。Nöldeke⁽¹⁾はこれをペルシャ語の長短母音無分別の自由性と考え、hōš hoš, gōhar gohar, šāh šah, kōh koh, dīgar digar, bīrūn birūnなどの語を挙げ全て第一音節に起りうるといっているが、音節の場合には関係なく起っている。⁽²⁾ 注目すべきことは、これら母音の長短が、Nöldekeの考える如く韻律の必要に応じてあらわれることにはまちがいが無いが、あらゆる語に亘ってこれがあらわれないことである。

現代ペルシャ語においてもš音は摩擦的噪音をともなった持続音であり、古代イラン語においてすでにその特徴を保っていたと考えられるところがある。pašm skt. pakṣman-, taš av. taša- skt. taks-, čašm av. čašman- skt. čakṣus-, kaš av. kaša- skt. kaks-などがそれである⁽³⁾ すなわち、すでに古代イラン語において先行子音の脱落を生ぜしめているが、先行母音は代償的な延長をなしていない。ただしš音の持続性の故にそれ自体が時間的に1 moraに備いし、アヴェスタ語 taša- を *tāša- と表記することはかえって非合理的であったと考えられる。現代語音も pa'šm, ta'š の如くであり、pašm taš の如く発音されない。

ペルシア語h音はその由来する古代語音⁽⁴⁾を考慮の外に置いて、中世イラン語以来独自の音韻として発達したものと考えられる。šの場合と同じく、シャーナーメでは nigāh nigah, māh mah, sipāh sipah, kūtāh kūtah, jāh jah, rāh rah, siyāh siyahの形がみられる。この場合 -āh, -ahの対立は単なる長短音節の対立としてのみは考えられないふしがある。pahra, dahra⁽⁵⁾の語はそれぞれ av. pāθra-, skt. dātra- と対応し、pahlū と skt. pārçva- との対立も、Horu⁽⁶⁾に反してこの範疇に入れて考えるのが妥当であると思われる。近代ペルシア語においては全く確立したこの擦音hはむしろアラブ語h音よりはh音に近く前口蓋で調音せられるもので

ある。したがってペルシヤ語音hはいちぢるしく有聲的であり単一子音のみによって1 moraの長さに持続されるのは容易なことであると考えられる。⁽⁷⁾すなわち pahra, av. pāθra- 中の pah-, pāθ- における長短母音 a, ā は絶対的なものではなく、子音h, θの発声時間の長短を考慮に入れば、二つは多分同一の発生時間を要したものと考えられる。⁽⁸⁾

しかしペルシヤ語hの一面として語の頭中末において消失する現象がある。anŷuman < av. hanŷamana-, andām < av. handāma- に対して hangām, hanŷār, hagirz は古代イラン語*ham- を保存している。すなわちh音には多分調音位置の異なる二つのものがあり、その契機の一つはイラン語における方言的差異に帰せられるものであろう。地名 Hamādan を中世ペルシヤ語 Ahmatan⁽⁹⁾, アルメニヤ借用語 Ahmtan と対照する場合、古代ペルシヤ語 Hagmatāna- の中世語形が語頭hを喪失したのに対し、再び語頭のhを回復しているのが注目される。ペルシヤ語にあらわれるべき本来のイラン語的hには口蓋的な有聲h音と喉頭的な無声h音とがあって、前者はアラブ語h音の影響を受けて漸次浸透してきたものと考えられ、後者は同一方言内においてさえ表記されたり或はされなかつたりしたものと考えられる。近代ペルシヤ語の表記法が固定するまでに、従来の中世語におけるhの有無が一方はhを以て、他方は'を以て表記せられたものと考えられる。したがって Hamadān の中世語形 Ahmatan の如きも、それ以外に語頭のhを有する*Hahmatan なる語が存在したと想像することができる。すなわちシャーナーメにあらわれる šār šāris- tān (< šahr šahristān), čār (< šāhār), čil (< čihil) などの初期のペルシヤ語的現象は、語末のhの消失を示すシ

ャーナーメの padša (< padšah), giyā (< giyāh), guvā (< guvāh), dēbā (< dēbāh) と共に喉音的hの発展をあらわすものと考えられる。

中世ペルシヤ語、ことに近代ペルシヤ語に多くみられる非語原的な語頭のhは、母音発生の際の alifの強度に起因するもので、方言的なものであると思われる。

シャーナーメにおけるgの音価については判然としない。dīgarのみが digarの形を有するが、その外にgの先行母音が長短両方を有する二重形はみ当らない。⁽¹⁰⁾初期のペルシヤ語からすでにk, gの混乱がみられ、7世紀のルーミーがkとgとを押韻させるのをみても単に後世のコピストの誤写としてのみ考えられないふしがある。⁽¹¹⁾

次にペルシヤ語rとそれに関する他の若干の音韻について考察してみる。シャーナーメにあらわれる、古代イラン語* -dātā-, 中世ペルシヤ語 -dāt の近代語形として -dād, -yād, -yār の三つがあげられる。

すなわち、

xudādād	faryād	baxtyār
Barḍād	bunyād	Isfandyār
pākdād		šahryār
		hōšyār
		Māhyār
		Jānūšyār

などである。

faryād, bunyād における -yād は明らかに中世語形 -dāt から発展したものである。⁽¹²⁾語原的にはそれぞれ古代イラン語* fryōdātā-, 中世イラン語* bundāt が指定せられる。

ペルシヤ語yの発生には特殊なものがあると思われる。上記 faryād, bunyād 中の -yād も単に中世語 -dāt の表記法 yht を -yāt と読みあやまり、近代語風に -yād となったとは考

えられない。ペルシャ語語末の *y* は古代イラン語 *-d-* に対応している。pay < av. paða- op. ni-padiy, xōy < op. xauda-, rōy < av. raoda-, nāy < *nāda- (skt. nāda-)。すなわち古代語音 *d* は母音間にあって *ð* に変化し、これが近代音において、*y* を以て表わされるに至ったことが推定せられる一方パルチア語からのアルメニア借用語は、このイラン語音 *ð* を *r* を以て表記している。⁽¹³⁾ xoir < op. xauda-, boir < av. baoidi-, Mar-k' < op. Māda-, maðaxā⁽¹⁴⁾。なおユダヤ・ペルシャ語 poriz もペルシャ語 pā-yīz を示しており注目に値する。すなわち *d* から *y* へ移行する途中において両者のいずれにも属さぬある種の音韻が存在していたことが知られる。古代イラン語 *d* はまた *h* へ移行する場合がある。zirif mp. zrēh < av. zrāða-, sipāh < av. spāða-, sarāy < op. *srāda-。一方アルメニア借用語はそれぞれ zrāh-k', spāh, srah を示し、ペルシャ語音に同調している。すなわち古代語音 *d* は *h* にも移行し、*y* への移行とは異った発展をなしている。しかしペルシャ語 Māh (Vīs u Rāmīn) とアルメニア借用語 Mar-k' との対立は、ペルシャ語音 *h* とアルメニア語音 *r* とが甚しく異ったものではなかったことを示している。このペルシャ語音 *h* はアルメニア語音 *r* から推せば、前舌的擦音であったと考えられる。古代語音 *d* の *y* および *h* への分化の契機は明らかではないが、語末においては持続の有声子音として、調音位置も相接したものであったことが推定せられる。

現代ペルシャ語 *d* 音は全て歯音的であるが、初期のペルシャ語では母音につづく *d* 音は擦音化されていたことが立証せられる。シャーナーメにおいては būd, sūd などのペルシャ語は、アラブ語 'ūd, ŷūd とは押韻せず、アラブ語音 *ð*

と押韻する。すなわち実際には būð, suð と発音せられていたことが知られる。若干のペルシャ語には、この *ð* が表記せられて現在に及んでいる。paðīraftan, guðāštan, kārad, gunbað。ノゾ世紀の写本には、この *ð* に代って *z* が表記されたのみみられる。⁽¹⁵⁾

さて古代、中世語形 -dāta-, -dāt がペルシャ語において -dād, -yād, -yār であられることは上にみた通りであり、-dād, -yād がそれぞれ -dād, -yād と発音せられていたことも推測せられるところである。

Nöldeke (Persische Studien II. 7 Anm. 2) はペルシャ語形 Isfandyār と表記されていることを指摘している。シャーナーメには *ð* と *z* とが押韻する事実があり、⁽¹⁶⁾ すでに guðaštan, guzaštan の中にその混同を示している。すなわちペルシャ語 Isfandyār の *r* 音は、古代語 *t* が有声擦音化され、更に *z* の過程をへて、如何なる契機によるのか不明ながら本来のイラン語的 *r* の表記をえたものと考えなければならない。⁽¹⁷⁾

上記の諸事実から推せば、Isfandyār はかつては *Isfandyāz と発音せられた過程をへたことは明らかであり、*r* の調音位置が *z* のそれに非常に接近していたものであったことがうかがえる。

この種 *r* の調音はすでに古代イラン語的であったと考えられる事実がある。古代イラン語において *r* + *t* < št なる現象がみられるが、多分に反転音的であった *t* に同化せられた *r* が *z* の位置にまで後退し、*z* *t* が更に同化せられて št となったものと考えられる。⁽¹⁸⁾ アヴェスタ語 aša- はアール

ヤ語形 *arta- に由来するが、*asta- であられずして aša- であられることは、イラン語における特殊性とみることができ。⁽¹⁹⁾

ペルシャ語形 -dād, -yād, -yār への発展の由来として考えられることは、-dād を

有する形が多分に国民的色彩を保ち、イスラーム化の後もある階級によってこの種の音韻変化にとどめられたと考えられ、-yād において正統なイラン的音韻変化の段階に達したと考えられる。Horn (Gd. Ir. Etym. 251) の如く、-yār の r を d の書きちがいと考えるには、それに該当する語詞も多く首肯せられない。別に Darmes-teter の解釈もあるが⁽²⁰⁾ わたくしはかえってイラン語 r の当時の調音位置を語るものと考えたい。アラブ表記法を借りたベルシヤ表記法においても r, z, ž は (ر, ز, ج) の如くあらわされ、調音位置が前方より後方へ移動する当時の調音の状態を示している。

古代イラン語表記法における l 音韻の欠如は⁽²¹⁾ アールヤ語的 l が、古代イラン語において上記 r と殆ど同じ調音位置において調音せられたことを示している。アヴェスタが、パルチャ朝ないし、サーサーン朝に結集され、しかも r, l 両音韻を有せるセム系文字からその表記法を借り来ったにも拘らず、両音の分別に無頓着であったのは上の理由によるものであろう。⁽²²⁾ 中世典籍ベルシヤ語における r, l の表式は無差別的に lāmiδ と nūn とが援用せられるが、アルメニヤ借用語から推せば r, l 両音韻の差別は存在していたものと思われる。Hübschmann (Persische Studien § 140) は中世、近代ベルシヤ語において r, l の差別が新しく発展したものであると考えているが、若干の語詞が印欧語的 l を受け継いでいることからみれば、少くともこれら両音韻に関する限り古代語とは別の方言系統のものであると思われる。lab < lat. labium, gulū < skt. gala-, lat. gula, kal < av. kaurva-, lat. calvus。

シャーナーメにあらわれる東部イランの個有名詞にはこの r, l 両音韻の混乱がみられる。東部イランのシースターンを流れるヒルマンド川は、

シャーナーメでは Hērmand の形でのみあらわれる。Morgenstierne (Etym. Vocab. of Pastō 30) によればパシュト語では Hēlmand の形であらわれ、現代のベルシヤ語も Hēlmand をもってあらわされる。中世ベルシヤ語形 Hilmant は字母の浮動性のため何ら決定的なものを与えない。ロスタムの父 Zāl は Zāl zar または Zāl-i zar とも呼ばれ、その第一要素 Zāl, 第二要素 zar はそれぞれ skt. jāra-, jar- に対応し、同一語原に属している (Horn, Gd. Ir. Etym. 648)。すなわち Zāl の l は語原的 l に反しており、東部イラン語の r, l の無差別は、古代イラン語の音韻法を継承せるものであり、パルチャ、サーサーン朝期中世イラン語さらに近代ベルシヤ語は r, l に関する限り別の方言的要素を有するものと考えられる。⁽²³⁾

さて、この r 音は現代のベルシヤ語では如何なる音価を有するのであろうか。r は上ハグキの直下で前舌をもって調音されるので、著しい有声持続音を構成し、それ自体でポジションを構成しうる。ベルシヤ語においては garmā, sarmā, kardan, dar, xurmā, barnā, partāb, čarb などが、実際は g'a'rmā, sa'rmā, k'a'rdan, da'r, zu'rmā, ba'rnā, pa'r-tāb, ča'rb の如く発音せられるのはこれを物語っている。初期のベルシヤ語発音もこれと大差なきものであり、⁽²⁴⁾ bīrūn, birūn の対立はけだし r の持続性の問題として解釈することができる。⁽²⁵⁾ アヴェスタ語において r のみの表記法として hr がみられ、多分アールヤ語的 r がアクセントの影響もともなって hr をもって表記されたものと思われる。ベルシヤ語接尾辞 -kar -kār, -gar -gār, -var -vār の対立もこれによって理解できるものと思う。

II

以上シャーナーメの音韻、ことに子音を中心に
して若干の考察をなしてきたが、この事実を準拠
して以下シャーナーメの韻律の問題について考察
を進めてゆきたいと思う。

アヴェスタのガーサーの韻律法は、音節の長短
には全く関係なく、音節の個数を以て韻律を計る
ことにあり、新体アヴェスタの韻律も前者と同じ
ことであったことは Geldner が指摘している
ところである。アヴェスタにおいてアールヤ語的
音韻がイラン語的に如何なる音価を有していたか
の究明は、アヴェスタのテキストクリティークに
おける一つの課題であろう。中世ペルシャ語には
現在詩形を以て伝わっているものはないが、サー
サーン朝ないしその後 / ~ 2世紀の間中世ペルシ
ャ語詩が存在していたことは諸々の徴証によつて
うかがうことができる。しかしイランにおいて長
短音節による詩形がいつ、いかにバドゥインない
しアラブから借り入れられ、発達してきたかは現
在の資料では明らかにしえない。Nöldeke (Ir.
Nepos. 91) は M. Qazvīnī が Kāve 誌
に寄稿したバルクの歌に関して、その韻律は不完
全ではあるが、アラブ詩形の痕跡がみられず、同
じくバスラの町の青年の問答を詩にせるアラブ詩
人 Ibn Mufarriy のペルシャ詩形も、ア
ラブ詩形によっていないことを指摘している。

長短音節の劃然としているアラブ詩形は、ペル
シャ語音韻の特殊性には適合しない。アラブ詩形
— — — — — はペルシャ語では — — — — — あるいは — — — — — と
も読むことができる。しかし — — — — — の如き韻律は
ペルシャ語の如き音節構成の言語にあっては、叙
事詩の如き長篇に連続して使用することは殆ど不
可能とってよい。初期のペルシャ人により、ア
ラブから借用模倣せられた詩形は、したがって
Hazaǰ — — — — — | — — — — — | — — — — —⁽²⁶⁾ と
Ramal — — — — — | — — — — — | — — — — — とであ

った。ダキキーとフェルドシーが、シャーナ
ーメに Mutaqārib — — — — — | — — — — — | — — — — — |
— — — — — を採んだのは、これが叙事詩の軽快さにと
って、より鈍重な前二者に較べて優れたものであ
ったためであろう。

アラブ詩は長音節をともなった閉音節のみをも
って押韻するが、ペルシャ語においてはこのような
音節は言語の構造上生啻性あるものでなく、その
数は限られている。kār, šēr, gōš, rōd,
būm, būd, …… 。アラブ詩では長母音に
つづく二重子音は絶対に避けられる。しかしペル
シャ語には、短母音につづく二重子音 kard,
gird, čand, barf, čašm, …… な
どの語のほか、dašt, rēxt, Pārs,
Luh rāsp …… などの如き長母音につづく二
重子音を有する語が、その言語構造上多数存在し
ている。

シャーナーメにおいては、dāšt を — — — — — と
数えなければ韻律に合わず、kard, gird の
如きは単に — — — — — と数えなければ韻律に合わない。
dāšt の場合、時間的にも — — — — — に相当し、— — — — —
と数えられうることは上来の考察の結果首肯でき
る。⁽²⁷⁾ 同じく st の如き二重子音も、それぞれ
が単独にあらわれるときには音節を構成しないが
二重子音となることによって 1 mora に近づいた
ものと考えることができる。他の二重子音の例と
して rx, šm, rf, šk などがある。ところが kard, gird の場合、— — — — — と数えるべ
きことが最初に想定される。しかしシャーナーメ
においては — — — — — と数えられ、それも単に Muta-
qārib に適合させるためのものではないふし
がある。skt. vṛka-, kṛpa-, māka-
と av. vāhrka-, kāhrpa-, mahrka-
との対応は、アールヤ語における揚音的短母音に
つづく有声音 r が発声の初頭においてポジション
を形成していたことを示している。すなわち

kard, gird の韻律もアールヤ語的特性を継承し、時間的に 2 morae に等しい $\bar{—}$ をもって数えられたものと思われる。末韻における $dā\check{s}t$ や $rēxt$ が kard, rūz, tīr などと同じく $\bar{—}$ と数えられるのは如何なる理由によるのであろうか。これは Mutaqārib 調の各脚第一長音節のとり強音部が二重音子が形成する 1 mora を解消せしめて、先行長母音に吸収せしめたものと解される。前述のアールヤ語的揚音における $\bar{—} < \bar{—}$ の現象と対比すれば自ら首肯せられるものと思う。この場合 $\bar{—}$ の長さも強音部においては 2 morae に等しく数えられたと考えることができる。

シャーナーメでは押韻する語詞は限られておりしかも単子音に終る末韻の音韻も限られている。k, g, γ, ž, č, p, l, b, f, t, l があらわれることは皆無あるいは極めて稀であり、擦音及び、r, m, n をその殆ど全てとしているのは注目しに値する。シャーナーメにおいては r, m, ž に限って同一語が単子音と重複子音との両方をともなって併存している。zarr:zar, parr:par, parrīdan:parīdan, barre:bare, darrīdan:darīdan, burrīdan:burīdan, tarr:tar, xarram:xaram, dumm:dum, summ:sum, kamm:kam, Jammsēd:Jamsēd, diramm:diram, ummēd:umēd, x^vassī:x^vasī, pašše:paše。ほかに二個所ほど \check{z} の二重形がみられる。これらの語は語原的にはあるいは rr を、あるいは r を有するものであるが、その音の特殊性の故に、長音節を必要とする場合には rr, mm, šš の如く、短音節を必要とする場合には r, m, š の如く、適宜書記されたものと考えられる。これに対して、t, k, f の如き音は、xaft:xaṭ, badtar, battar:batar, šaff:šaf, šakk:šak

の如く、本来の二重音子が適宜単子音化されて書記されている。

以上考察してきたことにもとづいて、以下の詩行を読めば次の如くなる。biyārāst jāng
 $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, Pārs Qāran $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$,
 āvēxt bar $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, biyamēxt
 tiryāk rā $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, gōšt
 pārae $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, ravān yaftandaš
 $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, Guštāsp guft $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$
 $\bar{—}$ 。 dāštand $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, rēxtand
 $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, sērvār $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, kārzar $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$
 $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, šādmān $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$ 。 dād dānā
 は上乗の理由から、Mutaqārib 調 $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$ に読みえない。Variante dād u dānā は $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$ に読みえて、意味の上からも一層明らかである。Guštāsp u guft は、その Variante Guštāsp guft の方がよりフェルドーシー的であり、意味上もより明らかである。dašt u farrī もフェルドーシー的にはその Variante dāšt farrī $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$ を彩るべく、想定された形 dāšt ū farrī も韻律の上からみて不可である。kāst azō も kāstzō の方がより古く、フェルドーシー的であると考えられる。dōstār は語原的に ap.*daustāram に由来し、それ自体 $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$ に数えられる。その Variante dōstdār も $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$ に数えることができるが、語原的には došt + dār に由来し、後代の改新形であることは明らかである。すべて後代のコピストの改竄と考えられる。

シャーナーメにあらわれる n の音価に関して若干注目すべきものがある。すなわち x^vānd, mānd の如きは行中において $\bar{—}$ をもって数えられ、Māndan, x^vāndaš, īnhā は、 $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, nišandaš, zabānhā, kamīnhā は $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$, dāstānhā は $\bar{—} < \bar{—} < \bar{—}$ の如

く数えられる。後者の場合は各脚の強音部が作用していることは、 $x^{\vee} \bar{a} n d \bar{u} \text{ sipāh } \underline{\quad} \underline{\quad} |$
 $\underline{\quad} \underline{\quad} , x^{\vee} \bar{a} n d \bar{a} z m \bar{u} d a e \underline{\quad} \underline{\quad} | \underline{\quad} \underline{\quad} \underline{\quad} \underline{\quad} |$ と同じくそれを解することができる。しかし $\bar{m} \bar{a} n d \bar{a} z \bar{o}$ の如きは $\underline{\quad} \underline{\quad} | \underline{\quad} \underline{\quad} |$ に数えなければならず $\bar{m} \bar{a} n d \bar{z} \bar{o}$ の Variante のないところからみれば、10世紀にすでに、nは先行母音を鼻音化する傾向のものがあつたことがうかがえる。現代ペルシヤ語の鼻音nはアールヤ語的音節構成性を喪失し、先行母音を鼻音化するが、10世紀においては、いまだ一部に音節を構成する機能を有していたことは上によって明らかである。シャーナーメにあらわれる $\bar{b} \bar{a} m / \bar{b} \bar{a} n$ (< $\bar{e} \bar{v} \bar{a} n$) の対立は、本来のnの音価が喪失する過程において近接音mをもってそれに代えたものと考えられる。 $\bar{B} a h r \bar{a} m$ < mp. $\bar{V} a r a h r \bar{a} n$ < av. $\bar{V} a r a \bar{t} h r a \bar{y} n a -$, $\bar{s} \bar{a} m$ < av. $x \bar{s} \bar{a} f n y a -$ 。

しかし、シャーナーメにおいては少なからざる語詞が人工的に韻律に調整されて使用せられているのも見逃せない事実である。 $\bar{b} i n i \bar{s} \bar{a} n d \bar{a} n d$, $\bar{b} u g z a r a d$, $\bar{b} u k \bar{u} \bar{s} \bar{a} d$, $\bar{n} a d \bar{a} h \bar{a} n d$, $\bar{n} a b \bar{a} v \bar{a} d$ はそれぞれ $\bar{b} i n \bar{s} \bar{a} n d \bar{a} n d$, $\bar{b} u g z a r a d$, $\bar{b} u k \bar{s} \bar{a} d$, $\bar{n} a d \bar{h} \bar{a} n d$, $\bar{n} a b \bar{v} \bar{a} d$ と読まなければならない。 $\bar{b} u g z a r a d$ の形は、すでに $\bar{M} u w a f f a q$ の詩中にあらわれて当時の口語に存在していたことは $\bar{N} \bar{o} l d e k e$ (Ir. $\bar{N} e p o s$ 95) も指摘している。 $\bar{d} u v \bar{a} n z d \bar{a} h$ は $\bar{d} a h \bar{u} d \bar{o}$ $\underline{\quad} \underline{\quad} \underline{\quad} \underline{\quad} |$, $\bar{d} a h d \bar{o}$ $\underline{\quad} \underline{\quad} \underline{\quad} \underline{\quad} |$ をもって代えられている。この傾向は個有名詞にことに多くあらわれる。 $\bar{K} a i \bar{K} \bar{a} \bar{o} s$ < $\bar{K} \bar{a} \bar{o} s - i \bar{K} a i$, $\bar{D} i z - i \bar{R} \bar{o} \bar{i} n$ < $\bar{R} \bar{o} \bar{i} n d i z$, $\bar{E} r \bar{a} n \bar{s} \bar{a} h r$ < $\bar{S} a h r - i \bar{E} r \bar{a} n$ 。

後記 1. 本稿では国際音韻記号及び音声記号は使用しなかった。

2. 紙幅の関係上、それぞれの語詞に

訳語を付加しなかった。

3. 京大文学部足利先生所蔵の Wolff: *Glossar zu Firdsis Schahname* を使用させて頂いたことを深く感謝している。

註

- (1) *Das iranische Nationalepos* 1920, 91
- (2) シャーナーメにあらわれるものとして、 $\bar{e} \bar{s} \bar{a} n \bar{e} \bar{s} \bar{a} n$, $x^{\vee} \bar{a} b \bar{a} n \bar{i} d$ $x^{\vee} \bar{a} b \bar{a} n \bar{i} d$, $\bar{b} \bar{a} z \bar{a} r g \bar{a} n$ $\bar{b} \bar{a} z \bar{a} r g \bar{a} n$, $\bar{p} \bar{e} r \bar{o} z g \bar{a} r$ $\bar{p} \bar{e} r \bar{o} z g \bar{a} r$, $\bar{h} \bar{o} \bar{s} \bar{v} \bar{a} r$ $\bar{h} \bar{o} \bar{s} \bar{v} \bar{a} r$, $\bar{s} \bar{a} k \bar{a} r$ $\bar{s} \bar{a} k \bar{a} r$, $\bar{s} i y \bar{a} h$ $\bar{s} i y \bar{a} h$ などがある。
- (3) 古代イラン語 * $-x \bar{s} -$ であらわされるものはペルシヤ語で語中・語末において $-x \bar{s}$ であらわれるものがある。 $\bar{b} a z \bar{s} a d$ av. $\bar{h} a z \bar{s} a i t i$, $\bar{t} n x \bar{s}$ gr. $\tau \acute{\omicron} \xi \omicron \nu$, $\bar{v} a z \bar{s} \bar{u} r$ < $\bar{v} a z \bar{s} \bar{a} b \bar{a} r \bar{a} -$
- (4) ペルシヤ語hの起源に関しては Gr. Ir. Ph. I. II. 93 参照。
- (5) 両語ともシャーナーメにはあらわれない。しかし $\bar{B} u r \bar{h} \bar{a} n - i \bar{Q} \bar{a} \bar{t} i$ 所収の古語である。アルメニヤ借用語 $\bar{p} a r \bar{h} a k$ 参照。
- (6) *Grundriss der neupersischen Etymologie* 342 はペルシヤ語 $\bar{p} a h \bar{i} \bar{u}$ とこの語は音的に直接連らないものと考えている。
- (7) 現代ペルシヤ語においては $\bar{T} i h r \bar{a} n$, $\bar{m} i h \bar{m} \bar{a} n$ はそれぞれ $\bar{T} e ' h e r \bar{a} n$, $\bar{m} e ' h e m \bar{a} n$ と発音せられ $\bar{p} a h l \bar{a} v \bar{i}$ は $\bar{p} a ' h a l \bar{a} v \bar{i}$ の如く開える。
- (8) $\bar{p} \bar{u} r$ < mp. $\bar{p} u h r$, $\bar{s} \bar{a} r$ < $\bar{s} a h r$, $\bar{h} u \bar{j} \bar{i} r$ < $\bar{h} u \bar{c} i h r$ などにおける代償的延長は、後続するr音の特種性によるもので、初期ペルシヤ語の $\bar{h} r$ > \bar{r} の過程において $\bar{l} m o r e$ の代償を先行母音に負わせたものと考えられる。後段参照。
- (9) アルメニヤ語の5世紀における借用語の中にも $\bar{a} n d e r \bar{j} a p e t \bar{h} a n d \bar{e} s$ (< skt. $\bar{s} \bar{a} m - d e \bar{c} a -$), $\bar{a} m \bar{b} a r \bar{h} a m \bar{b} a r$ の如く、語頭のhがあらわれるものとあらわれないものとがみられる。
- (10) $\bar{n} \bar{e} k$, $\bar{n} i k \bar{u}$ の相異はアクセントの推移によるもので二次的なものである。
- (11) 現代イランの印刷物にあらわれる \bar{k} , \bar{g} も恣意的であって統一性がない。いずれも極端な前口蓋音であるが発音においてポジションを形成しない。

(12) Horn, Gd. 828 はアヴェスタ語 fra-dāta- に語原を求めているが妥当ではないと思われる。この語に対する中世語訳は fradāt が当てられているが、該語に一般である音写的傾向によるものと考えられる。アヴェスタ Yt 46² にみえる rafaδrām čagvā hyaṭ fryō fryāi daidīṭ にあらわれる fryā- と dāta- との合成形 *fryō, dāta- がその語原と考えられる。

(13) 現代の東部アルメニア語 r 音は後出の初期ペルシヤ語の r 音に似たものがあると考えられる。r 音は巻き舌の r 音である。

(14) 現代ペルシヤ語 malax は方言的に別の音韻変化をしている。ペルシヤ湾岸に飛来するイナゴ meigū は古代語 *madaka- に由来し上記の変化にしたがっている。

(15) Brown, JRAS 1895, 237

(16) Rückert, ZDMG X, 199

(17) アルメニア借用語 Spandiat は近代語形と較べれば、中世的であるが、サーサーン中期の -dāt がすでに -yāt に近づいていたことを示している。すなわち部分的には母音間 -d- の -y- への移行が、中世ペルシヤ語表記法の分別点の有無を考慮の外に置いて、すでに中世イラン語的なものであったことがわかる。mp. rōδ, rōy <av. raoδa-, mp. bōδ, bōy <av. baoiδi-, mōδ, mōy <op. *mauda-。

(18) ペルシヤ語動詞不定法 dāštan dār-, guzāštan guzār-, kāštan kār, などの起源についてもこれと同じことが考えられる。Hübschmann § 90 の説明は gāštan, gaštan <*gārštan, garštan のみに当てはまるが、dāštan の場合には妥当性がない。šumurdan šumār-, sipurdan sipār-, āzurdan āzār-, afšurdan afšār- は Horn (Gd. Ir. Ph. 140) の考える如き、過去分詞形 šumurda-, sipurda-, āzurda-, afšurda- より形成された不定法ではなく、št と変化しなかった裏には何か方言的なものがあったと考えられる。

(19) ペルシヤ語 ārd は方言的に別の発展をしている。アルメニア語 alem <*ardem と同じく rt > rd の変化をなしており、ārd の語頭長母音は原形 *artā- のアクセントの位置より来るものであると考えられる。後段参照

(20) Etudes Iraniennes I. 73 では

ペルシヤ語 -yār の起源を古代語 -dāta- から音的に説明できないものとして、接尾辞 -dār との類推から *yādār を措定し、これが -yār になったものと説明している。

(21) 古代ペルシヤ語碑文中の外来個有名詞 Nandintabaira- 'Nadintubēl', Bābiru- 'Babylon', Arbairā- 'Arbēla', Tigrā- 'bab. Diqlat' に対して、わずかに二語 Haldita-, Dubāla- において l に関して特別の表識がみられる。Horn, Gd. Ir. Ph. 55

(22) パルチヤ朝からサーサーン朝にかけてのアルメニア借用語においては、r, l の差別がみられ当時の中世イラン語ないし中世ペルシヤ語と古代語との音韻の差異を示している。

(23) Geiger は、バルーチ語の l は明らかに二次的に発展したものであると述べている。(Lautlehre des Baluci)。パシュト語の l は一般にイラン語 t, d, θ より発展したものである。γēli <av. gaēθa-, sil <av. sata- lēvar <skt. devar- (Etymologie und Lautlehre des Afganischen 40)。

(24) シャーナーメでは larzīdan の語のみしかあらわれないが、Burhān-i Qāti' には Transoxiana の方言として larzīdan の所載がある。この事実はフェールス方言の r と異り、後舌的な r が存在したことを示している。

(25) bīrūn, birūn の対立は、同時に初期のペルシヤ語のアクセントがより近代のペルシヤ語のアクセントに推移する時期をも示している。すなわち bīrūn が bīrūn に推移する途中において、r の有する持続性が -ūn に吸収せられて birūn の過程をへたものと考えられる。

(26) 羽田博士史学論文集(言語宗教篇)下昭33 206 以下の「日本に伝わる波斯文に就て」中の第一連(巻頭写真の上段)の前半行は Haza によっており、シャーナーメの詩句ではない。第二連前半行は韻律が乱れているが、後半行は Mutaqārib によっている。下段の二連はそれぞれ押韻しているが、韻律は著しくくずれている。

(27) Noëldeke (Ir. Nepos 93) は、かつて、シャーナーメにあらわれる dāšt の韻律から、フェルドーシーの時代には実際に dāšt を dāsat の如く発音していたものと考えていた。しかし Mittwoch, Ritter, Browne らによって、イラン人が dāšt を dā^ašt の

如く発音し、Horowitz, Andreas らによつて、インド人が $dā\check{s}t^a$ または $dā\check{s}^a t$ の如く発音している事実を知らされたと述べている。近代ペルシア語における Anaptyxe の現象は、長母音につづく二子音と、短母音につづく三子音の最後の子音が流音または鼻音である場合のみに起っている。

$\bar{a}far\bar{i}n$ < mp. $\bar{a}fr\bar{i}n$ av. $\bar{a}fr\bar{i}na-$,
 $r\bar{o}\check{s}an$ < mp. $r\bar{o}\check{s}n$ av. $rao\check{s}na-$,
 $r\bar{o}\check{r}an$ < av. $rao\check{r}na-$, $g\bar{o}har$ < mp.
 $g\bar{o}hr$ skt. $gotra-$, $u\check{s}tur$ < av.
 $u\check{s}tra-$ 。

京都大学文学部昭和34年度西南アジア関係講義題目

()内は教官名、敬称略、 ABC順

西南アジア史序説	(足利・中原)
ヘブライ民族史	(有賀)
アラビア語 (初級)	(藤本)
アラビア語 (中級)	(藤本)
中央アジア・トルコ語史料の研究	(羽田)
トルコ語 (初級)	(羽田)
古体 $Ya\check{s}t$ の研究	(伊藤)
パフラヴィー語史詩における歴史	(伊藤)
Veda 文集	(伊藤)
Avesta 語・Pahlavi 語初歩	(伊藤)
ヒッタイト言語と歴史	(岸本)
ヒエログリフ講読 (初級)	(加藤)
ヒエログリフ講読 (中級)	(加藤)
ヘブライ原典による旧約研究	(G. G. Lloyd)
古代オリエントにおける土地制度の研究	(中原)
シュメール語・アッカド語入門	(中原)
梵語文法	(大地原)
乾燥地帯と牧畜	(織田)
サーマン朝社会の研究	(佐藤圭)
チベット語	(佐藤長)
ヒンディー語	(沢)
近代ペルシア語	(沢)
イスラーム社会の成立	(嶋田)